

## 言葉の不思議な力

内田あゆみ

このゼミをとりたいと思った理由、それは説明会のときの「魔術的」という言葉にあった。ピエロという存在のもつ不思議な力に惹かれ、それを漠然と卒論のテーマにしようと思っていた当時の私には、このゼミ以外は考えられなかった。

1年間を通じてのゼミで得た大切なことのひとつは、言葉のもつ魅力、魔力だったろう。私は幼いころから、言葉に異常に興味を示す子だった。書道家である母のもとで多くの文字にかこまれて育ち、文字には力の宿ることを教えられていたからでもある。言葉はこのうえない喜びや勇気を与えてくれただけでなく、このうえない哀しみや怒りをよびおこした。どんなに医学が発達しても、言葉によってうけた傷は直せない。言葉は刃のような凶器だ。しかしその傷を癒し、ときには毛布のように人を暖めてくれるのも、やはり言葉である。

言葉は人間にだけ与えられている不思議な道具。それにもかかわらず、私たちはその言葉をまだ使いこなせないでいることを、ゼミによって痛感した。卒論のために先生がやってくれた特訓・日本語講座では、私たちが自分の言語である日本語すらも、あやふやにしか使っていないということを思い知った。意味も知らずにへんな流行語や、インチキ和製外国語を平気で使っているという事実にはショックをうけた。

卒論の書き方について、先生がひらがなを多く用いるように勧めたことにも、意表をつかれた。「字数をかせげる」(笑)だけでなく、「ひらがなは日本語の美しさを支える要素だ」という理由を挙げられたとき、私はハッとした。気がついていなかった。いままで文章を書く際に、私はできるだけ漢字に変換することを心がけていた。小学校のときからそう教えられてきたのだ。それが大学の4年になって、その逆ともいえる「ひらがなを活用しよう。意味のあやふやな漢字熟語にばかり頼らず、ひらがなで書けるところはひらがなで！」の一言。私

は一挙に卒論を書きかえた。ひらがなは文章にニュアンスと深みを与えたようだった。

思えば、私がいちばん先に覚えた文字はひらがなであり、小学校までの私の世界そのものがひらがなで構成されていたのだ。いまも日ごろ感じたことを詩にして書きとめることがあるが、そのほとんどはひらがなになる。無心の私にとっては、世界はまだひらがなのままなのかもしれない。意味もあやふやな漢字熟語をならべたり、本来ひらがなであるべき言葉をわざわざ漢字に変換したりすることのほうが、かえって安易であることがわかった。そして、これからの私は、もっと日本語を、言葉を、大切にしていけるだろうなと感じた。

このゼミでは、ほかでは予想のつかないことが次々におこる。ほかの学生にゼミの話をすると、「ゼミで！？」と驚かれることが多かった。学ぶ場は、私たちのそう思いこんでいる教室という範囲をいつもとびこえていた。その意味でも強く印象に残っているのは初夏の合宿である。とくに絵本の森での実習は楽しくてしかたがなかった。あんなに夢中になって絵本を読んだのは十何年ぶりだろうか。友人が「あゆみ行くよ！」と呼ぶ声もほとんどきこえないほどで、読みおえたときにはもう周囲にだれもいなかった。

もうひとつ挙げるとすれば、シュヴァンクマイエルについての講義と、それに関連して見た葉山の美術館でのシュヴァンクマイエル展だろう。この人の映画『アリス』にはショックを受けた。私が子どものころに好きだったアリスはディズニー風のアリスで、兎もかわいいイメージだったのに、いま目の前にあらわれたのは、不気味で悪趣味ともいえる世界。こんなものすごい作品をつくった人の脳みそを覗いてみたい。そう思っておとずれたこのシュヴァンクマイエル展だったが、しかし、複雑怪奇で病的なものを想像していたシュヴァンクマイエルの美術作品は、謎とユーモアと偶然にみちみちた魅惑的なもので、予想以上に私の心をとらえて離さなかった。

あるいはすでに先生の講義で、シュルレアリスムについて聞いていたせいもあったのだろ

うか、なんの違和感もなくこのチェコのシュルレアリストの世界にふみこんで、むしろ自由を感じている自分がいた。

それどころか、彼の作品には愛があった。オブジェ、コラージュを愛にむすびつける魔術的な講義が思いだされてきた。

ほかにも、夏のブラッサイ展で見た目のさめるような白と黒のコントラストや、秋のイスラム美術展の、なぜか女性を思わせる色彩の神秘など、魔術的なものを感じたことが多かった。

こんなふうに、このゼミから得た多くのことは、教室という枠をこえ、どんどん外の世界へとひろがってゆくもので、けっしていわゆる知識にとどまらぬ、もっと感覚的に内側へもひろがってゆく、そんな体験を可能にした。それを今後、どこで味わうことができるだろう……本当に大切なことを体験したのだと、卒論を終えたいま実感している。

いわゆる知識はいずれ年とともに薄れてゆくだろうが、ここで得た感覚 Sensation のほうには薄れることなく、私のなかに生きつづけてゆくとしたい。3年ゼミのはじめにランボーの同名の詩でわかったように、感じる心と体を失ってはいけない。五感をとぎすまして生きていれば、日常のなかにもさまざまな感動が待っている。見すごさない。物たち、オブジェたちの送るサインを、私はもう見すごさない。

卒論でピエロについて自由に書けたのは、先生のゼミの講義と指導のおかげである。いちばんの難関だといわれている卒論を、私はなぜかとても楽しんで書くことができた。ピエロのように自由に、拘束からのがれて生きることを、先生が魔術的に吹きこんでくださったのだと思う。